

# 与論の衣生活文化

## －ピキマギ（無双仕立ての袷着物）の構成について－

多々良 尊子

### 1. はじめに

芭蕉布の調査のために、2010年3月に与論の菊 千代さんのもとを訪れた。菊さんは、高度経済成長により生活様式が激変し、急速に失われていく与論の文化を惜しみ、その伝承・保存に努めてこられた。1960年代より、農具、漁具、生活用品、衣服などの収集を続けるとともに、ものだけではなく、島言葉や昔話の保存にも取り組み、『与論方言辞典』<sup>1)</sup>、『与論のしまがたり』<sup>2)</sup>などを著わしている。また、幼い頃から機織りの技術を習得し、伝統的な技法を守って現在まで芭蕉布を織り続けている。1966年に与論民具館を設立し、さらに1984年には与論民俗村（写真1）として発展させ、伝統的な生活を紹介している。

常時展示されているものではないが、300点以上の着物のコレクションもある。与論で広く着用されていた「バシャギン」（芭蕉衣：芭蕉布の着物）を中心としたもので、その中から何点か見せていただいた。「ピキマギ」と呼ばれる無双仕立ての袷着物は、

- ① 芭蕉布の袷である
- ② 筒袖、膝丈で衽（おくみ）がない
- ③ 繕いを重ね、継ぎあてだらけである

という特徴がある。夏物の素材である芭蕉布を用いて袷にしていることや衽を省略していることは、本土の着物と比べて異色の構成である。薩摩藩による奄美諸島の支配以来の経済的な困窮を色濃く反映したのものであると考えられる。しかし、緋や縞はとても美しく、製作者の思いが心を打つものであった。

本報では、江戸時代末から明治時代にかけての与論の衣生活文化について調べ、それを背景として庶民の知恵により工夫された仕事着である「ピキマギ」の構成の特徴について考察したい。

### 2. 与論の芭蕉布

与論の衣生活文化は、芭蕉布なしに語ることはできないが、その歴史や生産工程については、多くの文献<sup>3~7)</sup>があり、それらを参考にされたい。特に、菊さんの芭蕉布については<sup>3)</sup>に詳しい。芭蕉布は、葛布、科布とともに三大原始布とされている。古来、身近な植物から繊維を採り、衣服に仕立ててきたが、非常に手間がかかり、消費性能上の欠点もある。



写真1 与論民俗村

茅葺き屋根の民家、高倉、赤瓦の民家などが移築されているほか、芭蕉布や黒糖作りも体験できる。

そのため、木綿の普及とともに、徐々に忘れ去られてきた。与論で、昭和初期まで芭蕉布が広く用いられてきたのは、気候風土、薩摩藩の支配、自給自足という要因が挙げられる。大変な手間をかけて、女性が家族の衣服を製作してきたことは、忘れてはならないことである。農作業や家事・育児に加えて、糸を績み、製織し、着物を縫ってきた逞しさと、時間的・技術的な制約がある中で、出来る限り美しく着やすいものを作ろうとする心の豊かさは、現代の私たちに失われたものである。

### 3. 『南島誌』に描かれた与論の衣生活

『南島誌』<sup>8)</sup>は、1873（明治6）年10月に大蔵省の久野謙二郎氏が大島郡内を巡視し、当時の生活状況を著したものである。鹿児島県立図書館収蔵の写本から、与論の衣生活について述べられている「与論 第四章衣服」を引用する。

「四時ノ衣服其ノ貧富ニ因テ同シカラス 富民ハ五月ヨリ九月の初旬ニ至ル迄布衫ヲ用ヒ九月中旬ヨリ十月迄単衣十一月ヨリ十二月迄袷一月ヨリ二月迄緋衣三月袷四月は単衣ヲ用ユルノ風習ナリ 其疾病アルモノト細民トノ如キハ此ノ限りニアラス 島民其階級ニ因テ禮服ヲ用ユルハ大島ニ同シ 而シテ尋常一般ノ衣服ハ廣袖ニシテ半襟ノ長サ膝ニ及ホス 絶テ袴ヲ着ルコトナク外套ハ貴尊ノ前ニ之ヲ憚ル 平常ノ衣服夏ハ皆芭蕉ヲ以テ之ヲ織ルモノニシテ僅カニ膝ヲ下ルニ過キス 冬ハ木綿ノ袷ヲ衣ル最モ貧困ナルモノハ芭蕉ノ衣ヲ以テ兼用ス 其ノ富豪ナルモノニ至テハ嚴冬緋袍ヲ衣ルト雖トモ中等以下の家産ノ者ハ常ニ之ヲ衣ル至ラス 被モ亦中等以下ノ有ル所ニシテ細民ハ之レナシ全戸方褥一二枚ヲ所有スルニ過ギスト云フ」

（四季の衣服は、貧富によって同じではない。富裕な者は、5月から9月初旬までは植物繊維の薄物、9月中旬から10月までは単衣、11月から12月までは袷、1月から2月まで綿入れ、3月は袷、4月は単衣を用いる風習である。病気の者や貧しい者は、この限りではない。

島民の階級により礼服を用いるのは大島と同じである。しかし、日常着は、広袖で襟の長さが膝までである。決して袴を着ることはない。コートは、身分の高い人の前では遠慮する。

日常の衣服については、夏は皆、芭蕉を用いて織ったものであり、膝より少し下の丈に過ぎない。冬は、木綿の袷を着る。最も貧困な者は、芭蕉の着物で兼用する。富裕な者であれば厳冬に綿入れの掻巻を着るが、中産階級以下では、それを着ることができない。そればかりか、掛布団を所有すれば良い方であり、貧困な者は掛布団もなく、各戸で敷物1～2枚を所有するにすぎないという。）

ここに著されているのは明治の初め頃の衣生活の様子であるが、薩摩藩による砂糖買上政策が厳しくなった江戸時代後半より、ほぼ変わらぬ状況であったと推測される。基本的な衣生活の習慣として、

- ・着物の構成は、広袖で袴下が短く、琉球風である。袴は着用しない。
- ・衣更えは行われていたが、薄物・単衣の着用期間が長い。
- ・夏は芭蕉布の単衣、冬は木綿の袷が基本である。

ことなどがわかるが、貧富により大きな違いが見られる。

- ・冬物の木綿の袷がない者は、年中、芭蕉布の着物で過ごす。恐らく、芭蕉布の袷または重ね着で過ごしたのであろう。
- ・綿入れの夜具があるのは、富裕層だけである。貧困層は、掛布団もないような状況で

ある。

大部分を占めていた農民の困窮した生活ぶりが伺える。与論の夏には芭蕉布の性質が適しているが、冬は綿入れまでではなくても、保温性に優れた木綿の着物が必要である。全国的にみると、江戸時代中期以降は、綿の栽培が広まり、庶民の衣服は綿織物が主流となっていた。木綿はふんわりとして肌触りが良く、保温性に優れているだけでなく、他の植物繊維と比べて糸・織物に至るまでの生産性が非常に高い。苧麻の10分の1の労力でできると言われている<sup>9)</sup>。与論でも、庭先や畑で綿の栽培は行われていたはずであるが、耕作可能な土地は黍栽培が強制されていたため、とても自給できるものではなかったのではないだろうか。島外からの移入は、法外な価格設定がなされていた。文政11（1830）年の大島における交換比率は、白木綿1反が黒糖45斤であった<sup>10)</sup>。現在の貨幣価値に換算するのは難しいが、晒木綿1反が1000円以下で購入できることや、当時は砂糖が高級品であったことを考えると、10倍以上の生活実感ではないだろうか。それゆえ、富裕層以外は、冬でも木綿を着ることができず、綿入れの布団もない状況にあったのである。

明治20年代以降は、様々な衣料が本土から移入されたが、芭蕉布は島民に親しまれ、第二次世界大戦前まで広く用いられた<sup>11)</sup>。与論の気候に適していることや、良質の糸芭蕉が採れることによるものであろうが、それだけではなく、根気のいる手作業を厭わない習慣が受け継がれていたことも大きな要因であろう。困窮の中にあっても、自らの手を動かすことによって家族の生活を支えていく意志、創意工夫により美しいものを生み出す喜び、無心に手を動かすことにより得られる安らぎなど、精神的な背景も大きかったと思われる。

## 4. 衤のない着物

### 4-1. ヤンチュの唄

庶民の生活が苦しかったのはいつの時代も変わらない。特に、奄美諸島では、薩摩藩の砂糖買上政策が経済格差を拡大させ階層分化を促進したと言われている。大島では、債務の代わりに家卓として豪農に仕えるヤンチュ（家人）が、江戸時代末には人口の2～3割に達していた<sup>12)</sup>。最下層の衣生活の状況として、履物や帯の着用は許されず、1年に1着程度主家から支給される着物で過ごしていたと言われている。

大島郡瀬戸内町の林家では、20～30人のヤンチュを抱えていた。お正月の酒席で、お揃いのお仕着せの老ヤンチュが、衤のない着物を着て年老いていく身の上を悲しんで

「ヤンチュ身やあわれ クミネ無しやギン（衣）着ち年取りゅんあわれ」

と唄ったと伝えられている<sup>13)</sup>。クミネとは衤のことで、長着の前身頃の衤の下にある半幅の部分を用いる。着物は貫頭衣の形態であるため、後身頃と前身頃が一続きで、肩山で折り返されている。そのため、巻き衣の形態で着装しようとする、前身頃の重なり分が不足してしまう。それを補っているのが衤である。ここでは、着丈や袖には触れられていないが、恐らく「衤のない着物」は「衤のついた袂袖で総丈の着物」と対比されていると考えられる。袖を小さくしたり、着丈を短くすることは、用尺の節約だけでなく、仕事着としての動きやすさを意図したものでもある。しかし、衤を省くと、前の重なり分が少なく、はだけやすくて見た目が美しくない。衣服は常に人と共にあることから、「衤のない着物」が貧困や身分の象徴のように見られていたと推測される。

#### 4-2. 『南島雑話』の挿絵

農民の服装は、唄だけでなく、『南島雑話』の挿絵から知ることができる。『南島雑話』は、薩摩藩の名越左源太が1850～1855年に奄美大島へ遠島になった時期に著した見聞録である。図1は、『南島雑話』<sup>14)</sup>の挿絵のひとつである。唐芋掘りから帰る女性を描いたものである（写本によっては、「麦の穂を運ぶ島婦」と説明されている）。『南島雑話補遺篇』の扉絵や『南島雑話の世界』<sup>15)</sup>の口絵としても用いられているので、代表的な挿絵であろう。右側の女性は、膝上丈の「衽のない着物」を着ている。カラーの図版を見ると、紺と赤の縦縞（恐らく、藍と車輪梅で染められたもの）である。左側の女性の着物は、膝下丈で、衽がついているようにも見える。若い女性の表情が美しく描かれており、手に百合の花を持ち、きれいに整えられた髷には簪を挿している。背負っている籠や負紐のデザインも洗練されている。それに対して、着物は破れ、帯ではなく縄状の紐を結び、裸足である。畑仕事をする女性は、皆、このような服装だったのだろう。せめて、女性を美しく描いているのは筆者の思い入れであろうか。



図1 『南島雑話』の挿絵<sup>14)</sup>  
畑仕事の帰り道の女性が描かれている

また、着物の平面図も何種類か載っているが<sup>16)</sup>、衽つけの切りかえ線が描かれていない。当然、衽のあった大袖の礼服にも描かれていないことや、着装図では前身頃が深く打ち合わされていることから、衽はあったものと考えられる。筆者にとって、衽は重要な意味を持っていなかったのか、または、写されていく過程で省略されたのだろうか。

養蚕の技法や芭蕉布の生産工程も詳細に描かれている。服装についても、普段着、外出着、礼服、帯、手拭い、花嫁衣装、ノロ（琉球・奄美諸島の信仰における女性司祭）の衣装、遊女の衣装など多様に描き分けられている。袖丈や衿幅などの寸法も書き添えられている。それだけの観察力や筆力がありながらも、衽には興味がなかったのか。筆者の名越左源太は流人の身といえども武士であり、お正月でも衽のない着物を着る悲哀にまでは思いが至らなかったのかもしれない。

現在の衽のない構成としては、はっぴや半てん、二部式の着物の上衣などが挙げられる。これらは、上半身のみに着用するものである。長着では、昭和初期の世界大恐慌で疲弊した農村で、布を節約するために衽のない長着が作られたという記録がある<sup>17)</sup>。また、仕立て直しの過程で、傷んだ部分を除き、袖丈を詰め、衽を省くということも行われていた。それらは、農民の日常着として用いられてきた。

## 5. 与論の仕事着

### 5-1. 仕事着の名称

与論では、芭蕉布を「バシャー」、着物を「キパダ」、裕を「マギ」、畑を「パル」、海を

「ウン」という。農作業用の着物を「パルクパダ」、海の仕事着を「ウンキパダ」、芭蕉布の袴を「バシヤマギ」、農作業用の袴の着物を「パルマギ」という。さらに、繕いを重ね継ぎ接ぎになったものは「ブク」と呼ばれていた。ブクは布を無駄にしないという意図だけでなく、布を重ねることによって保温性を増し、冬の作業着としていた<sup>18)</sup>。晴着、外出着、仕事着などの着用目的による区別や、単衣、袴、袖なしなどの構成上の区別もあり、多様性が伺える。

### 5-2. ピキマギ

菊さんが、1978（昭和53）年に、市川まこさんから入手したバシヤマギ（袴の仕事着）を、写真2および図2に示す。台帳には、市川さんは当時91歳と記されており、恐らく、大正時代に自身で製作し、着用し続けたものであろう。「ピキマギ」といわれる構成で（「ピキ」はひき戻すという意味）、表から裏に布を引き返した無双仕立ての袴である。13種類の芭蕉布が継ぎ合わされたもので、刺し子縫いされている。従って、パル・ブク・ピキ・バシヤのマギと言える。着古されて、正確な寸法も測れないほどであった。物資の窮乏と農作業の厳しさを物語っている。初めから、何種類かの布を組み合わせて縫製されたように思える。肩や衿、前身頃の上前部分には美しい与論の緋柄（写真2左の後身頃の上部に用いられているもので、細か

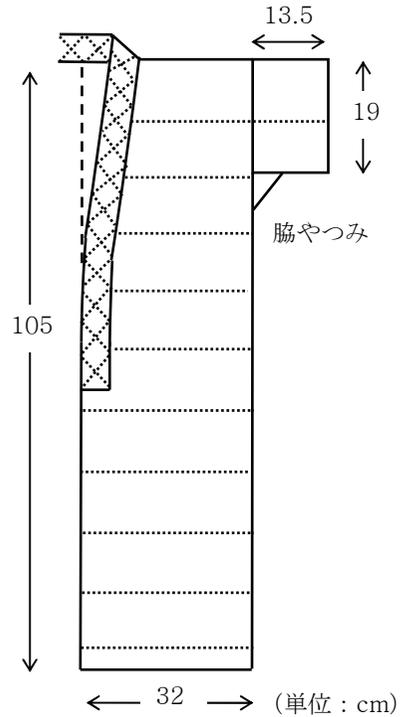


図2 与論民俗村所蔵のピキマギの構成傷みが激しく、細部の寸法は測定不能であった。破線は刺子縫い。

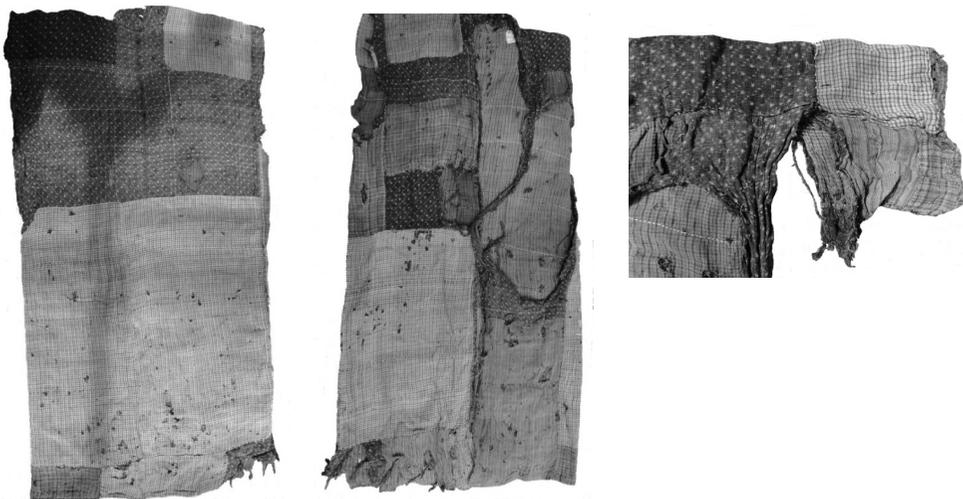


写真2 与論民俗村所蔵のピキマギ（左：後身頃 中：前身頃 右：左袖）

い緋模様が斜めに配置され、動きのあるデザインである)を配置している。着用により傷んだ部分を補うことにより、継ぎ接ぎになっていったのだろうが、何かデザイン的な意図も感じられる。

参考として、与論町歴史資料館「サザンクロスセンター」所蔵のピキマギを、写真3および図3に示す。センターの管理者によると、由来は不明であるということだった。確証はないが、『与論島民俗文化史資料』<sup>19)</sup>にバシヤマギとして載っている図版と同一のものではないかと思われる。恐らく、著者の町田厚長氏が収集したものであろう。市川さんのピキマギと同様に手間をかけて作った布を無駄にしないために、多くの工夫のあとが見られる。

5-3. ピキマギの構成

袖：筒袖で、袖幅は半幅、袖丈は腕が通るだけの長さであり、徹底して用尺を節約する対象となっている。仕事着であれば、大きな袖は邪魔である。袖幅を半幅にすることにより、図4の裁ち方ができ、1反から、単衣なら2着、無双仕立ての袷なら1着を仕立てられる。



写真 3  
サザンクロスセンター所蔵のピキマギ

照明による退色が著しい。脇やつみがなく、刺子の糸が古いものではないことから、昭和に入ってからのもものと推測される。袖は並幅である。

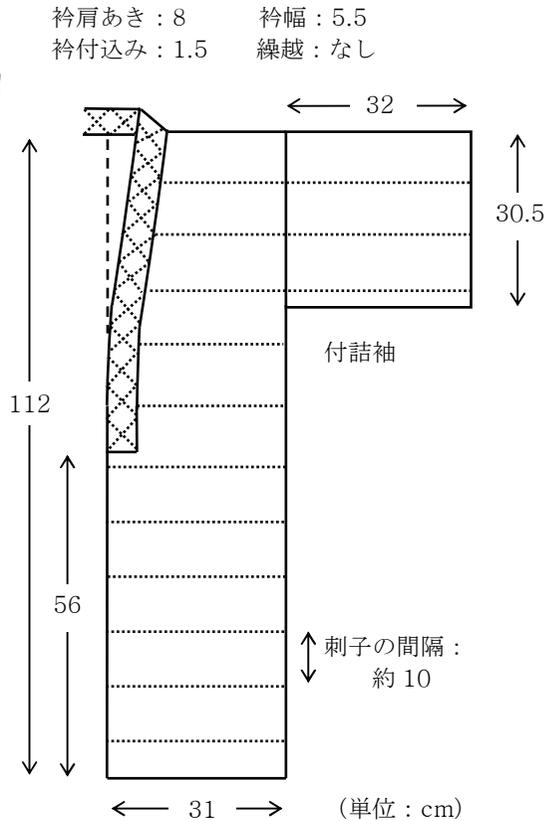


図3 サザンクロスセンター所蔵のピキマギの構成



図4 ピキマギの裁断図

単衣の裁断図を示す。おおよそ1/2反でできる。衿の場合、身頃と袖の用尺が2倍になる。

**脇まち：**琉装と同じく、袖下にまちが入っている。菊さんによると、脇まちを「ワキヤーシミ」というそうだが、恐らく「脇やつみ」が転じたものと思われる。明治時代の着物には、ほとんど入っているそうである。袖丈が短いため、動きやすさと袖つけの補強のために有用である。

**衿：**前幅は布幅をいっぱいを使い、衿がない。通常の長着の構成では、脇と衿つけの縫代幅が数cmずつある。長さを掛け合わせると、かなりの面積が縫いこまれている。ピキマギの縫代の幅は、ほとんど1cmであり、手間をかけて織った布を全く無駄にしない作りになっている。

**衿：**棒衿で、「かげ衿（そら衿ともいう）」といわれる構成である。身頃を挟み込むように縫いつけられているため、前身頃の縫い代が衿芯代わりになっている。仕立ての簡略化が主な目的であろうが、衿は傷みやすい部分であり、補強の意味もある。

**無双仕立て：**一般に、裏布は、表布よりも薄く滑りの良いものを用いるが、表裏を同じ布で仕立てることを無双仕立てという。長襦袢の袖は、着つけた時に振から裏が見えることから無双仕立てにする。また、羽織は着脱することが多く、裏が人目につきやすいため、裏表同じ布を使うことがあり、贅沢な仕立て方とされている。しかし、ピキマギの場合は、芭蕉布で衿を作らなくてはならないという状況によるものである。引き返しにすることで裁ち目が少なくなり、仕立て直しやすく、合理的な方法である。

**刺子：**刺子は、表裏を綴じる役割と、丈夫に仕立てるために施されていたと考えられる。さらに、サザンクロスセンターのピキマギは、紺の無地であり、白い糸の刺し子がデザイン上のアクセントとなっている。

#### 5-4. ピキマギの試作

市川さんのピキマギの寸法で、単衣の着物を試作し、数名の学生に試着してもらった（写真4）。その結果、次のようなことがわかった。

- ・衿がなくても、着装した姿は悪くない。
- ・身長150cm位であれば、膝が隠れる丈となる。
- ・腰囲85cm位までなら、前身頃の打ち合わせも十分とれる。



写真4 試作したピキマギの着装

問題点としては、

- ・袖丈が短く、肘までしか届かない。仕事着としては適当だろうが、衿仕立ての冬物としては、衿がもう少し必要である。
- ・仕事着は、帯ではなく紐または縄帯を締めていたという記録に従って着装したが、着つけの落ち着きが悪い。

以上の考察から、ピキマギの構成は、布を無駄にせず非常に合理的であること、衿はないが実用性があることがわかった。また、市川さんのピキマギ以外の着物についても、どれも個性がある。裁ち本もなく、物差しもない中で、手を尺度として仕立てていたため、融通をきかせることができた。自家で採れた分の糸で織りあげた布の長さに合わせて、また、手持ちの端切れを組み合わせて、工夫をこらしてきたことがわかる。いわゆるお針の稽古や学校教育での和裁の学習を経験していなかったため、型にはまらないおおらかな縫い目に好感が持てる。それが、ブクの着物から、経済的な困窮よりも作り手の温かみを感じさせる要因になっていると考えられる。

芭蕉布の美しさについては、『南島雑話』で「越後上布にも勝って美しい」<sup>20)</sup>、柳宗悦の『芭蕉布物語』で「今時こんなに美しい布はめったにないのです」と称えられている<sup>21)</sup>。しかし、租税として納められていた極上の芭蕉布と、庶民が仕事着にしていた芭蕉布では趣が異なっていたと思われる。菊さんによると、新しい芭蕉衣を着て、海辺の仕事をしてはならないと言われていたそうである。海に浸かった部分が海水で精錬・漂白され、糸が細くなるのを嫌ったためである。現在でも、沖縄県の西表や竹富では、海晒しを行っているが、与論では、仕事着として丈夫なことが第一とされてきたことがわかる。また、与論は、琉球文化の影響が大きく、離島であるため固有の文化が形成されていた。衣生活の様式も、戦前までは本土とは異なる特徴が残されていた。与論民俗村に収集されている着物は、特別なものではなく、庶民が日常着として着用していたものが中心である。それらを精査することにより、生活実態や与論独自の衣生活文化が考察できるはずである。また、収集者である菊さんは驚くべき広い見識をもっておられ、聞き取りをしてまとめる必要がある。許しが得られるならば、引き続き調査を続けたい。

## 追記

与論民俗村が収蔵する与論島の生産・生活用具1094点が、2011年1月に文化庁から登録有形民俗文化財に指定された。鹿児島県内では初である。

## 文献

- 1) 菊 千代, 高橋俊三:『与論方言辞典』, 武蔵野書店 (2005)
- 2) 菊 千代:『与論のしまがたり』, はる書房 (1985)
- 3) 川上カズヨ: 南部九州の古い衣料 (第3集) - 芭蕉布の現状 -, 鹿児島純心女子短期大学研究紀要, **30**, 93-103 (2000)
- 4) 小林孝子: 南日本の衣料について (第2報) - 奄美の芭蕉衣 -, 鹿児島大学教育学部研究紀要, **23**, 57-62 (1972)
- 5) 喜如嘉芭蕉布保存会:『喜如嘉の芭蕉布』, 喜如嘉芭蕉布保存会, p.88-115 (1984)

- 6) 平敏子：『平敏子の芭蕉布』，日本放送出版協会，p.124-125（1998）
- 7) 「織の海道」実行委員会：『織の海道 沖縄本島・久米島編』，「織の海道」実行委員会，p.232-245（2004）
- 8) 久野謙二郎：『南島誌』，p.138-139（1874）
- 9) 永原慶二：『苧麻・絹・木綿の社会史』，吉川弘文館，p.212（2004）
- 10) 茂野幽考：『奄美染織史』，奄美文化研究所，p.51（1873）
- 11) 大内森業：『ゆんぬー与論ー 島のくらしと民俗』，北風書房，p.39-46（1982）
- 12) 名越 護：『奄美の債務奴隷 ヤンチュ』，南方新社，p.35-38（2006）
- 13) 同上，p.90-91
- 14) 永井龍一：『南島雑話補遺篇』，非売品，扉（1933）
- 15) 名越 護：『南島雑話の世界』，南日本新聞社，口絵（2002）
- 16) 14) と同じ，p.3-9
- 17) 福井貞子：『ものと人間の文化史95 野良着（のらぎ）』，法政大学出版局，p.105-106（2000）
- 18) 与論町史編集委員会：『与論町誌』，与論町，p.1023-1026（1988年）
- 19) 町田厚長：『与論民俗文化資料』，個人出版，p.46（1980年）
- 20) 14) と同じ，p.17
- 21) 柳 宗悦：『芭蕉布物語（柳宗悦全集第15巻）』，筑摩書房，p.383（1981）